

やすだのぼる
安田 登
 能楽師（下掛宝生流：ワキ方）
 寺子屋 講師 （阿弥陀寺）
 こどもおばけ合宿 講師 //

主著に『論語』『あわいの時代』『あわいの時代の『論語』ヒューマン2.0』
 『能 650年続いた仕掛けとは』他多数。

こままたとき 親鸞聖人の 鳥



イラスト 中川 学

くらやみ 「暗闇の中のひかり」

いはいは儒教の経典である『論語』、そしてさまざまな仏教の経典があります。そのひとつに親鸞聖

「おお、なるほどなあー」と納得し、ときには救われることがあるというものです。たとえばキリスト教の経典である『聖書』。ある

世界宗教と呼ばれるものには、いくつもの共通点があります。そのひとつは、その宗教に詳しくなくても、あるいはその宗教を

「平易な日本語（和語）で書かれたお言葉」です。親鸞聖人がご在世のころには文字を読めない人たちが多かったでしょう。そういう方々はこれを耳から聞いたはずで、おそらくはゆつくり、ゆつくりと読まれた。ゆつくりゆつくり読まれる、そのひとつごと

「和讃」というのは「平易な日本語（和語）で書かれたお言葉」です。親鸞聖人がご在世のころには文字を読めない人たちが多かったでしょう。そういう方々はこれを耳から聞いたはずで、おそらくはゆつくり、ゆつくりと読まれた。ゆつくりゆつくり読まれる、そのひとつごと

「和讃」というのは「平易な日本語（和語）で書かれたお言葉」です。親鸞聖人がご在世のころには文字を読めない人たちが多かったでしょう。そういう方々はこれを耳から聞いたはずで、おそらくはゆつくり、ゆつくりと読まれた。ゆつくりゆつくり読まれる、そのひとつごと

人が残された、さまざまなお言葉もあります。私は能楽師で、浄土真宗の教理にはまったく明るくありませんし、親鸞聖人のお言葉、たつてすべて読んだわけではない。ただ、何かのおりにふとページを開き、そこで目にしたお言葉にいつも救われる思いがするのです。それを紹介するのがこの連載ですが、ここではよくご和讃を紹介し「ご和讃」というのは「平易な日本語（和語）で書かれたお言葉」です。親鸞聖人がご在世のころには文字を読めない人たちが多かったでしょう。そういう方々はこれを耳から聞いたはずで、おそらくはゆつくり、ゆつくりと読まれた。ゆつくりゆつくり読まれる、そのひとつごと

「明かりすら無い長い夜」そんな長い夜を過ご

す。
智慧の眼は、ふだん私たちがものを見る時に使っている「肉眼」ではありません。その目を使わずに真実を見る智慧の眼が「智眼」です。

「目を使わずにものを見るなんて、そんなことできるわけがない。できたとしても、それは修行を積んだ人だけでしょ」

そう思うかもしれません。しかし、私たちは「目を使わずにものを見る」ということを普通にしています。

「夢」です。
夢を見るときに私たちは「目」を使いません。夢を見る時のような、目を使わずにものを見る能力、それをさらに一歩進めたのが「心眼」であり、もう一歩さらに進めたのが「智眼」です。

「智眼」や「心眼」を使うときに、実際の「目」は邪魔になることもあり

ます。私たちがものを見る時には、さまざまに先入観やかたよりがあるからです。

イエス・キリストは「まず自分の目から梁を取りのけるがよい」と言いました。

目の梁とは、真実のものを見るときに邪魔になる障害物です。邪念や偏見です。それらを棄てて

真実の姿を見なさいというのがイエスの教えです。孔子は「視るには明を思へ」と言いました。

「明」という漢字の左側の「日」は、昔の漢字では窓の形でした。「明」とは、窓から月を見る形をあらわした文字です。

その窓がきれいな窓ならば月はその本来の姿を映します。しかし、曇った窓だったならば月も曇ります。

私たちは、何かを見るときに、自分の窓を通してしか見ることができません。そのことをよく思

いなさいというのが孔子の教えです。
イエスも孔子も、自分の目の汚れを払って、ものごとを正しく見ることが勧めます。しかし、親鸞聖人は少し違います。

真実の姿を正しく見る「智慧の眼」なんて持っている人はまれです。私たちはみな持つていないでも、それが人間。そんなことは悲しまなくてもいいとおっしゃるのです。

▼優しい阿弥陀さま

そして最後に「生死大海の船筏なり 罪障おもしとなげかざれ」と読まれます。

阿弥陀さまが私たちは救ってくださるとい

「本願」は、生死の大海での救いの船であり、そして救いの筏です。どんなに悪業が重くても、嘆くことはないよと教え

ます。
私はこのご和讃を読むと、いつも思い出すのがベッド・ミドラーという歌手が歌う『ローズ』と

後はこのような歌詞です。
夜がとても孤独で
道がとても長いとき
「愛」なんて
幸運で

強い人だけのものだ
と思うでしょう

でもちよつと思ひ出して
冬に厳しく積る雪の
ずつと深いところに
横たわる種が
太陽の光を浴びて
春にはバラとして
花を咲かせることを

『ローズ』で歌う「太陽の光」が阿弥陀さまの本願です。

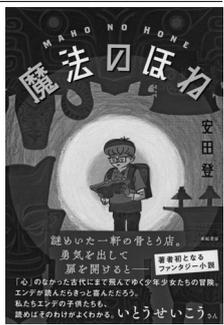
むかしの人は太陽を「おてんとう(天道)さま」と言いました。

「おてんとうさまに恥ずかしくない生き方をしなさい」などと言われ

ました。
おてんとうさま(太陽)は、いい人の上には照る

けれども、心がやましい人の上は照らしてくれないというような感じがあります。

しかし、阿弥陀さまは、私たちがどんなに罪深くても、また私たちの目がどんなに曇っていても、救ってくださるということです。いい人、悪い人の区別はないのです。



『魔法のほね』

本紙でもご紹介いたただいていますが、子ども向けの物語を書きました。『魔法のほね』というタイトルです。

魔法の骨というのは、三千三百年以上も前の古代中国、殷の時代の甲骨文のことです。漢字のもとになる古代文字が刻まれた骨で、占いに使われました。

おじいちゃんと一緒に甲骨文を読み解いた小学校五年生のたつきは、友だちふたりと一匹の犬と一緒に、殷の時代にタイムスリップしてしま

す。そして「心」が生まれた時代を体験し、生贄にされそうな少年たちを助け

ます。
お便りがたくさん届いています。そうなんです。この本は、子どもたちに漢字を好きになつてもらいたく

て書きました。
また「甲骨文を読みたい！」と思うようになつてもらいたく

て書きま

した。甲骨文字は現代の漢字のもとになっています。世界の古代文字には「甲骨文字」「楔形文字」「ヒエログリフ」の三種

があります。この中で現代までつながつているのは甲骨文字だけ。せつ

かく漢字を読める国の子どもなので

すから甲骨文字を読み、そして「心」について考えてもらいた

いと思

いました。
本書の最初には、主人公たつきが授業中に掛け算九九がわからなくなつてしまい、同級生から笑われるシーンがあります。これは私の実体験です。私は小学校時代、掛け算九九をとうとう最後まで覚えられませんでした。

この夏休みに、読んでみてくだ

さい！